

二月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

あるときは

木 畑 紀 子 京 都

残り花ふたつみつある酔芙蓉ばさりと剪りて季と別れつ
木の葉舞ひどんぐり落ちて秋景色地球が公転してゐるあかし
どんぐりがぶつかりながら転がりてゐるにぎやかさ下校児童ら
どんぐりに楊枝を刺せば独楽になりよろこび廻る卓上も秋
あるときは笹の葉の舟あるときは団栗の独楽来し方おもへば

鬼たち

島 田 暉 神奈川

春来れば緑ふくらむ公園の時間よ止まれ花咲き始む
烏らの黒きつばさは空に融け夕べしづかに満月の澄む
白筆で神は森林ぬりつぶし雪の景色となれるしづけさ
はげ頭いつのまにやら変はりたり雪に埋まれる深緑の森
足音をたてて鬼たち通りすぐ草は花咲き木は緑吹く

をととひ

藤 野 早 苗 福 岡

眉描いて眠る数日母の変告げる電話のあるやも知れず
危ふきを知らせる電話より十分 息せぬ母がわれを待ちをり
ありがたう、大丈夫よと脈絡もなく言つたつけをととひ母は
体温ののこる面に化粧せり黄泉がへるなら今と言ひつつ
明楽院釈鶴寿とは母のことめぐりの人をしあはせにせり

月の物語

小 島 な お*東 京

肺に開くちいさな穴を漏れてゆく呼気にまじれる雨の銀杏は
この秋に羊肉二度食べたこと気胸の胸に枯れ葉が鳴って
さむざむと二つの月の物語右肺萎みゆく胸の底
管入れて漏れた空気を抜くというポトルのように横たわり聞く
日赤の薄いカーテンその向こういくつもの顔すべてを待てり

☆

☆

水島 晴子 兵庫

湿らへる苔のおもてにしづかなり桜落葉の黄の明るさよ
心弱きわれよと見つむ紙幣なる塾創設の先生のかほ
テレビ放送技術のプロとならび観る(菊花賞)中継淀のそらあをし
レジェンドと言ひてくれたる人は逝き老い二人あて足ひき歩む
穏やかに微笑みたまふ面差しを心に呼びつ ただありがたし

高野 公彦 千葉

図書館でけふも新聞広げるは世間に居場所なき老人か
もろきうの緑を昼も夜も食べて今年の秋の暑き日々越ゆ
ミサイルもステルス武器も無き生活わが足音に目高ら集ふ
喜怒哀楽消えては生まれ雑文の行間をゆくごとき人生
神田川の鯉見つつ行くこの径は(終二散歩のみち)と思ひて

奥村 晃 作* 東京

トラックをいともやすげに転がせる強風が吹く常態ぞ今や
色々な経験積んで来たけれど今生きている未知の時間を
今月もみな病体で東大の2B囲碁会は開けなかつた
カミさまが居るはずだからカミさまにゆだねて過ごすしかないね我も
しだけ梅初めて見たり白き花しだるる太き枝々に付く

森重 香代子 山口

剪定を終へたる庭木ほがらかに雨露こぼし庭に立ちをり
投函に降りゆく山のポストには神去月のさむき風吹く
わが生活おぼつかなしと文字時計机に備へ子は往にゆけり
すこしづつ老いて間もなく九十年冬至の夕べ熱き湯を浴む
妻もたずわれの孫は東京に勤めなしつつ一人暮らせり

影山 一男 千葉

酒飲めずなれど居酒屋ガイド読みただよみ来るも白木の香り
われと妻昼餉のいなりに分けあひてテレビ見てをり仲良きごとく
トランプを斎藤知事を選びたる民意といふを疑ひやまず
大谷をMVPに選びたるプロフェッショナルを信じてやまず
男子校育ちのゆゑか古稀すぎてをりをりに見る性愛の夢

桑原 正紀 東京

フォッサマグナの底縫ふやうに上野から糸魚川まで二時間の旅
太平洋と日本海むすぶ海だつた信州を行けば海色のそら
フォッサマグナミュージアムは石の博物館石は地球の歴史を語る
さまざまな石めぐり見てこの星の四十五億年の奇跡をおもふ
ただだきし大き翡翠の勾玉を灯に透かし見る糸魚川の夜

狩野 一男 東京

オオタニの歩みのわきにわが生きの三十年をならべて 泣かゆ
「映え」と「萌え」想定以上の人気得て、心揺さぶる(工場夜景)
夏のあの工場夜景を思ひ出し、十一月の雨をたのしむ
深秋や 駅チカビルの屋上の朝雨に寄る鳩十一羽
鎮めてはならぬ怒りにこの夜はガンズ&ローゼズノーヴェンパーレイン

宮里 信輝 神奈川

今日は家近くの一〇〇本の桜の森の整備の日にて見学に来ぬ
愛川町坂本区にある「百本桜」うごめき始む今年の花
百歳を越えたる幹はもうあらず今年の花を咲かせる力
若き枝百歳の幹より出でて来て花咲かせ出すすもいろの
うらうらに照れる春陽に咲ききりしさくら花びら散れる花びら

小島 ゆかり 東京

鍵の鈴鳴るときいくつもの鍵がめざめぬ過去のとほくちかくで
いまなにか落としたぜつたい落としたとおもふけれどもあきかぜの道
空中のどんぼは風にも光にもなつて たまゆらわらふおほざら
あきかぜのなにごどうして蜘蛛になりなにがなにして人になりたる
栗最中みつしり甘し猫に見えわたしに見えぬ世の中のこと

大松 達知* 東京

ささなみの酒飲むことははるかなる冬とこころ通わせること
酒の味がしみるほど濃いを指すことば、それゆえ「酷」はひどいになつた
わけあつて飲まない夜のおぼつかかな、裸と禪はなぜに似ている
奠^{マユヒシユ}、書いて見せたりひとりでもええつ！といえば満足おじさん
これは詩のタイトルなのか黒板の「ザクセン・ラウエンブルク公園」

田宮 朋子 新潟

秋山の峠を越えて栃尾まで豆腐と油揚げ買ひに行く
客のためメインディッシュは蟹にせん寺泊へと車走らす
隅切りの卓上盆にしつらへる越後の秋の手料理七品
師の思ひ出こともごも語るうちに知る軍人恩給拒まれしこと
うすべにの食用菊のおひたしをおもひどほりの味といふ客

津金 規雄 神奈川

キスの場面多き映画を見たるのち夜の芝生のみどりに噓せる
たうとつなハグを一期の訣れとしみな追想の匣へとしまふ
〈月ゆゑの錯乱〉をメアドにしたる教へ子の来信途絶ゆあ夏を経て
くり返すひとつの旋律「トロイメライ」夢は今なほ夢のままにて
梨〈南水〉あまくとろけてうつつそみの糧となりゆくそのあはれさよ

小山 富紀子 京都

箕助のお初を迎へ彼岸にて喜びをらむ玉男の徳兵衛
「月しろ」を食みつつ語りし人のこと思ひ出しつつ「月しろ」を食む
砂を吐くボールの蜆に初冬の朝のひかりがしづかにそそぐ
「マンションノ屋上アンテナ3ジニネ」約束したらし二羽が寄りそふ
マンションの屋上アンテナ鳥たちのデートスポット今日はひよどり

清水 正子 神奈川

若き日の衝動買ひよ薔薇色のテールランプ埃かぶれり
点すとき妖精の帽子さながらのシェードが素敵ガラスのランプ
ティファニーやガレヂやないけど薔薇色のランプひそかに女孫がねらふ
少しかじりその気になつたガラス好きだつたがなれず夢追ひ人に
来春は卒寿祝つて蜜蠟のアロマキャンドルきつと点さむ

小嶋 一郎 佐賀

さう言へば庭に雀を見ず久し絶滅危惧種と聞きてうべなふ
氣に掛けてをりし障子を張り替へて米寿最後の為事となしつ
幾はくを残す命か一年ののちの卒寿を思ふ寝ながら
この五年新幹線の旅もせずほとほと遠し子の住む練馬
「歌できぬ歌」を作りて誤魔化すか五首目の歌にこれを並べて

福士 りか 青森

泥酔し雪の野原に寝入りたる若き日ありぬ壮年の父
いちめんの雪野にゐるか病室のベッドに眠る老年の父
この人はけふも出かけていくのだと着替へるわれを猫が見てゐる
リクライニングベッドを父の寝室に入れむと片付く雪のふる午後
本当に退院してもいいですか幾度も医師に念を押されぬ

風間博夫 千葉

広辞苑引けばありたる「磯松風」蒸し和菓子なり風ぢやないんだ
西窓のなくて我が家に入らざる二月二十日の貝寄せの風
雲海の上に抜けたる飛行機の下に雲、雲、雲が広がる
雲海の上は青空飛行機の機体さらさらさらきらめきめてゐむ
雲海の際に接する青き空そこまで白き雲が続きぬ

田中愛子 埼玉

でんわ一、ショートメール七、カード一、口頭ひとり「古稀おめでとう」
「七十よ」告げれば母は知りをれど「まあ」とおどろくふりせしならん
父と呼びし二十五箇年、老しと呼ぶ四十五箇年 ひつじぐも追ふ
暑い日も雨のふる日も寒い日もとほり過ぎればなべて夕風
つつしみてはがきを読み「気に入りの四首を採っていただきました」

小島ゆかり著書二冊

はるかなる虹

第十六歌集
コスモス叢書第1236篇

短歌研究社

令和6年7月刊 三〇〇〇円(税別)

送料三〇〇円

サイレントニヤー

猫たちの歌物語
コスモス叢書第1241篇

短歌研究社

令和6年8月刊 一八〇〇円(税別)

送料三〇〇円

連絡先 〒112-0013 東京都文京区音羽一―一七―一四

音羽YKビル 短歌研究社

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

蜘蛛の歌 コスモス叢書第1232篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう コスモス叢書第1233篇 六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三―二四―一〇

マリノホームズ1A 六花書林

高野公彦評論集 令和6年3月刊 二八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む コスモス叢書第1235篇 柘書房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼一―二―二五〇六

斉藤梢歌集 令和6年7月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青葉の闇へ コスモス叢書第1237篇 柘書房

著者住所 〒982-0831 宮城県仙台市太白区八木山香澄町

二―一〇―一三〇六 薄葉様方

橘 芳 園 新 潟

父母、檀徒おきて寺出し自己嫌悪二河の地獄に白道がなし
自己嫌悪つれどまよ親鸞も自が身蛇蝎のころと詠めり
僧の父と祖父をうとんじ歌の師と友に寄りきしことも蹉跎たり
僧辞めし罪ひししと思はるる子を追慕する人の言葉に
親鸞と善鸞の如父もまた寺を捨てたる子に背かれき

水 上 比呂美 東 京

胃ぶくろに羨美しく寄るところ三年前はピロリ菌ゐた
胃カメラはするりと抜けて終りです「お上手でした」と看護師さん言ふ
五本指くつ下を履くわが指は四本になる六本になる
五本指くつ下の足わが足は仙人掌の足よ猿の足よ
寝てる間に脱いだ五本指くつ下が小動物のやうな明けがた

鈴 木 竹 志 愛 知

短歌沼はまりですでに五十年超ゆそれでも初めは片足は岸
片足は岸におきたるままにして徐々に徐々に沼に引き込む
引き返す術など疾うに忘れ果て短歌の沼に心地よく浸かる
起きてゐる時間の八割いや九割短歌のために使はれてをり
短歌沼はまりてみれば人生が少しゆたかになると語らう

原 賀 璽 子 東 京

きぞの夜の月さながらと見えながらけふは十六夜やさしい月ぞ
隣室より漏るる灯でさがしものしてゐるわれの主婦歴ながき
生年も没年も知る唯一のひとチェーホフの『かもめ』また読む
人かげのなき源氏絵の(留守模様)いにしへびとの発想みやび
箸よりも親しくボールペン持ちてわれに字を書く晩年のあり

水 上 英 季 神 奈 川

味の濃いおかずばかりを食べてゐて断食は遠いといお守り
びきりりり時に稲妻走るがに切つたお腹がうづく宵闇
バレリーナを目指してゐるかのやうに子が全身反らせて駄々こねてゐる
瘡蓋のぶたを豚だと思つてる子よさういへばわれもさうだつた
目をこする仕草が子ども子どもとして温き布団に包まる子ども

大 野 英 子 福 岡

進撃の巨人が沖から来るやうな勇姿は絶えた水中翼船
不正ありて運航停止がもう長い真つ赤なボディーは色褪せてゐて
着岸の綱とる仕事をしをりしインドネシアの男らしいかに
定期船入りくるたびに身悶ゆるやうに揺れだす Queen Beetle
揺れながらワタシハナニモワルクナイ小さく小さく悲鳴をあげて

松 尾 祥 子 東 京

えへん虫、ヒステリー玉、気滞とぞストレス溜まりすぎたるわれか
外壁と屋根塗装せん四十年近く家族を^{まも}り来し家
父看取りしこの家で母も送りたし手摺をつけてドアを外して
姉夫婦八ヶ岳に越し隣りに次女家族住まん藤咲く五月
母が居て子や孫が居てわやわやと行けるとこまで行かうぢやないか

鈴 木 千 登 世 山 口

ゆらめきに身体揺れつつ水中を行き戻りたりジムのプールに
一周は四十メートル、泳ぎ×、右側歩行、ジャグジー付設
前を行く夫の左に傾ぐ癖変はず水中歩行のときも
目守りつつ夫の後行くわたくしを等しく目守るジムのスタッフ
覆ひたるシャツ越し若さにほひくる発光体を(青年)と知る

小田部 雅 子 静岡

斉藤 梢 宮城

クラシックの楽器かこれが 燃ゆるごとく轟くごとく沸く武道館
「紫の炎」いきなりはじまれば噴きあがるかな、フレイムジェット！
二十個の楽器、奏者の照り翳り Burn, Burn と炎柱が立つ
ヴァイオリン高く挙げてはふかぶかとりかへすれ スタオベ止まず
〈組長〉の見せたことなき面持ちの口ひきしめて天あふぐなり

東日本大震災より5000日 満月はこの夜雲に隠れて
俯きてゐること多い日々なれど表情ゆたかな歌を詠みたし
モネ描きし朝日にけふもあこがれる〈日美〉の録画のオルセー美術館
秋を結ぶ林檎ひとつが卓にあり青森産の（もりのかがやき）
そらよりの言葉としての雪が降る 詩人谷川俊太郎逝く

うたを味わう―食べ物之歌 ●高野公彦

九州の味 ―南瓜、どんこ、馬肉など―

日向南瓜豊後のどんこ肥後馬肉まくらさつま
焼酎 つくし大酔 山埜井喜美枝

うまい物をたくさん並べた歌である。読み方は「ひゅうがかぼちゃ、ぶんごのどんこ、ひごさくら、さつましょうちゅう。つくししたいすい。」

ただ食べ物の名を出すだけでなく、産地とセットになって並べられているのが特徴である。宮崎はかぼちゃ、大分はどんこ、熊本は馬肉、鹿児島は焼酎である。日向南瓜は、まさかりで割るという固いかぼちゃ

のことだろう。

ところで「どんこ」とは何か。広辞苑（第五版）を引くと、《どんこ（冬子）≡晩冬から初春にかけて採れる椎茸》、《どんこ（鈍甲）≡カワアナゴ科の淡水産の硬骨魚》とある。愛媛では川にいる小魚をドンコと言った。この歌の場合どちらを指すのか、私には判断できない。そこで作者に電話でお尋ねしたら、椎茸のことだそうだった。そう言え、大分は椎茸の名産地である。

「ひごさくら」と言っているのは、熊本に馬肉のうまいのがあるからである。薩摩の焼酎は有名である。芋焼酎が多く、香り

が強い。そのため一般の人からは敬遠されることもあるようだが、焼酎好きの人に愛飲されている。

最後の「つくし大酔」は食べ物ではなく、《筑紫福岡）では、これらの食べ物や飲み物をたらふくいただいて酔っ払う》という意味であろう。作者・山埜井氏は福岡在住で、女性だがお酒もいける人らしい。この歌は、九州各地の名産品を居ながらにして賞味して大酔する幸せを堂々とうたいあげた一首である。他に「天離る日田のさび鮎甘露煮のはららごうまし冬深みゆく」「深傷癒やす酒は辛口少々のこのわたに箸の先を汚して」などの作もあるから、この人は本当に良き食いしん坊なのであろう。引用歌は、いずれも歌集『歩神』より。

（『うたを味わう』より再録）